

## オプチナ修道院における聖師父文献の出版事業(3)

— ロシアの修道制の発展における聖師父文献の翻訳史を中心に —

清水 俊行

### 第五章 オプチナ修道院の聖師父文献出版一覧とその特徴

(9)『我等が克肖神父なる証聖者マクシモスの「天主経」講釈、並びに同著者による斎についての問答書』(1853)<sup>163</sup>

証聖者マクシモス(7世紀)の出版には数年を要したが、マカーリイ長老はそれが開始された1847年2月にすでにキレエフスキーにこの著作の翻訳にはいくつかの困難がある旨書き送っている。長老は書いている、「聖マクシモスの「天主経」講釈を出版するというあなたの目論見はすばらしいものですが、パイーシイ長老のテキストに触れずに欄外注でラテン語のテキストを使って説明するならば、その箇所の意味は一層不明瞭なものになってしまうでしょう」<sup>164</sup>。

実際、同書出版に際してマカーリイ長老とキレエフスキーの間にはスラヴ語訳とカトリック教会のラテン語テキストを照合した際に提起された様々な訂正をめぐる編集上の問題について、数度にわたる手紙のやり取りが行われていた。キレエフスキーは長老にこう書いている。

証聖者マクシモスの印刷された3枚の台紙には写本にはない数多くの変更がなされていることにお気づきでしょう。そのうち、「天主経」講釈になされたものはパイーシイ長老の翻訳の意図に適っており、書かれた内容の不明点をかなりよく説明してくれていると思われます。それにいくつかの注釈、例えば16や25頁の注釈などもわたしには非常に有意

<sup>163</sup> Преподобного отца нашего Максима Исповедника толкование на молитву «Отче наш» и его же слово постническое по вопросу и ответу. Перевод на славянский о. Паисия (Величковскаго); Перевод на русский Т.И. Филиппова с участием иером. Амвросия. М.: [Изд. Оптиной Пустыни], 1853. 108 с. 1200 экз. 40 коп.

<sup>164</sup> Из письма о. Макария к И.В. Киреевскому от 8 февраля 1847 г. Из кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002, С. 302.

義な内容と思われます。写本の中のいくつかの単語は府主教〔フィラレート・ドロズドフ〕自身の手によって訂正されています。彼がこれに従事したことは明らかです。しかし写本が府主教の手を経た後、ゴルビンスキーがいくつか補足をしているのですが、これは無用なものと思われます。例えば彼は 16 頁の本文に「爾の聖神は来たらん、そして我々は浄められん」といった言葉を付加しています。

注釈の中では有意義な説明となっていたのに、本文に彼が言っていない言葉を聖なる作者の言葉として付加されることで書物全体が台無しになってしまいます。ところがこれなどまだましなほうです。ですが、もう一つの加筆に関しては思い切って削除しました。というのは、それが誤った理解をもたらす可能性があると思われたからです。ゴルビンスキーはベルナル僧団の修道士たちによって出版されたラテン語の写本からその部分を採用したのです。そもそも何のためにパイーシイの翻訳にない言い回しをラテン教会の出版物から抽出してパイーシイの表現に付け加える必要がありますでしょうか。<sup>165</sup>

キレエフスキーが言う写本とは 18 世紀にパイーシイ・ヴェリチコフスキーがギリシャ語の写本からスラヴ語に翻訳してロシアに持ち込んだテキストのことで、そこにはパイーシイ自身によって頁番号が打たれていた。ここでキレエフスキーが問題にしている箇所は 29 頁にある以下の表現であった。パイーシイの写本にはこう書かれている、「あるものを別のもので代用することができないように、三位一体とは統一体から作られたものではなく、すでに存在するものであり、自ずと現れてきたものである」。<sup>166</sup> それをゴルビンスキーは以下のように加筆修正しているのである。「以下の例によって、あるものが別のもので代用されている実態を会得できよう。等価的で絶対的なものが何らかの相関関係によって、まるでそれ自体が罪とされている何らかの作品に代用されることはない。あるものが別のものによって置き換えられるかのように、三位一体が統一体から作られるのでも、それが有する属性が借用されるのでもない。つまり本体がおのずと姿を現したのである」。<sup>167</sup>

<sup>165</sup> Из письма И.В. Киреевского к иеромонаху Макарию от 8 октября 1853 г. В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 359-360.

<sup>166</sup> Там же. С. 360. その原文は以下の通り：Ниже яко иноу ину; не бо производству от Единицы Троица небытна. Суща и самоизъявна.

<sup>167</sup> Там же. 原文は以下の通り：Ниже ведеша яко ину чрез ину; не бо посредствуется коим-либо соотношением тождественное и безотносительное, аки бы произведение, к вине своей относящееся: ниже яко от иныя ину; не бо по производству от Единицы Троица, не заимствовано

ゴルビンスキーが付け加えた文章(イタリックで強調してある)はパイーシイの写本には見られないもので、上述のラテン教会の写本をもとに加筆されたものである。それでもキレエフスキーは正教思想家としての義憤にかられ、マカーリイ長老の祝福を得るまえに独自の判断で削除したのだった。彼は長老にこう説明している。

我々はパイーシイが書いていないことや、彼が書いたと見なすことも、マクシモスのどこかの本文にあると考えることも疑わしいものを彼のものにしてしまう権利はないと考えました。なぜならラテン教会の修道士たちはこのような場合良心というものを知らず、聖三位一体の統一的位階に関する教義への反証を固めるために何らかの言い回しを思いつくことなどわけもないからです。わたしはこうした感情を拠り所としてゴルビンスキーが加筆した言葉を削除しました。<sup>168</sup>

キレエフスキーが検閲者のゴルビンスキーに楯突いたのは単にパイーシイ長老のテキストには触れないという原則に背いたからではなく、挿入された引用句の中にフィリオケ(Filioque)<sup>169</sup>への仄めかしを嗅ぎつけたからに他ならなかった。キレエフスキーの歴史認識によれば、これは西方の伝承に対する形式主義的な理性の勝利の結果であった。彼の理論によれば、人民教育の性格はつまるところ聖三位一体の概念の受容如何にかかっていた。彼は原理的性格がさほど強くない細部においては妥協を余儀なくされることがあったものの、パイーシイのテキストだけは頑なに堅持しようとしたのはそのためであった。

キレエフスキーはそれ自体形式的なぎこちなさはあったものの、正しい精神のあり方を促す概念を帯びた言葉の総体のことをパイーシイ的体系と呼び、それが東方教会の聖師父の創作においては決定的な役割を担っていると見なしていた。彼はその『ヨーロッパの啓蒙の性格とそのロシアの啓蒙への関係について』(1853)において、「思弁の真実を志向するにあたり、東方の思想家たちは何よりもまず思考する精神の内的状態の正しさに配慮するのに対し、西方の思想家たちは諸概念の外的関係性により気を配っている」<sup>170</sup>と書いて

---

бытие имущи и самоиявлена Сущи.

<sup>168</sup> Там же. С. 361.

<sup>169</sup> 信経(Символ веры)ヘカトリック教会が「子からも」という一句を付け加えたことに発する、東西正教会の間に一大論争を巻き起こした争点。

<sup>170</sup> И.В. Киреевский. Полное собрание сочинений. В 2-х т. М., 1911. Т. 1. С. 201.

いる。この場合、ゴルビンスキーが写本の中の「監視 (смотрение)」という単語を「目的 (цель)」や「意図 (намерение)」に置き換えていることに対して不平をこぼしているのである。

克肖者マクシモスは同書の中で正教会の最も重要な祈り「天主經」<sup>171</sup> に関して、内容豊かで寓意的な解釈を繰り広げている。パイーシイ長老のスラヴ語訳と並んでチェルチイ・フィリッポフのロシア語訳が掲載されているが、後者はギリシャ語の原本に忠実であろうとするあまり文体的にはやや柔軟さに欠け、生硬に過ぎる感があると指摘されている。<sup>172</sup> いずれにせよ、この翻訳は 1853 年 11 月 23 日にオプチナ修道院に届けられた。<sup>173</sup> この書物が修道士たちの間にいかなる反応を引き起こしたかについては知る由もないが、キレエフスキーとマカーリイ長老の往復書簡を読む限り、二人の間には同書の翻訳の特殊性について繰り返し議論が起こっていたようである。キレエフスキーは書いている。

これらの表現を理解するのが困難である主たる原因は、霊的な高邁さというよりはむしろ当時の哲学体系、とりわけ新プラトン主義において採用されていた独特の言語形態にあるように思われるのです。わたしが神父様に対して理解不能の箇所に古典学派の思想を言い表す哲学的用語や言い回しを提案するなど、翻訳について敢えて自分から助力を申し上げたのもそういう次第だったのです。しかし神父様、実のところ、わたしが考えていたのは文字通りの意味であって、霊的な意味においてではなかったのです。もし問題が後者の点にあることがわかっていたら、敢えて自らそこに関与しようなどと申し出たりしなかったでしょう。わたしは後者の問題について言えば、思想が不明瞭に表現されているところだけでなく、それが例えば福音書の(中略)のように、子供にも理解できるようにわかりやすく書かれているところでさえ、何も見えていないことを自分でも十分に承知していますし痛感してもおります。あなたが書いておられ、行動によって開示される最高度の思弁に関して言えば、主があなたでなければそれを他の誰に付与されるというのでしょうか。

<sup>171</sup> 「天主經」はキリスト教会においては、教派を問わず、天の主・神を讃える代表的な祈禱文である。「天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん。我が日用の糧を今日我等に与へ給へ。我等に負ひ目ある者を我等赦すが如く、我等の負ひ目を赦し給へ。我等を誘ひに導かず、尚我等を凶悪より救ひ給へ」(ハリストス正教会訳)。

<sup>172</sup> В.В. Каширина Литературное наследие Оптиной Пустыни. М., 2006. С. 123.

<sup>173</sup> НИОР РГБ. Ф.214. Опт-361. Л. 164.

それは主の前で灯火さながらに燃えさかる生命力のある、生きた思弁なのです。それは周囲のものをあまねく照らし出し、あなたを取り巻いているすべての潔き灯明の燭台に火をつけてくれます。これはあなたと同時代に生きる人々に益を与え、知恵を与え、慰安するために送られた神の賜物として、我々があなたからは遠く離れたところで敬虔さと愛をもって眺めている光なのです。そんなわけで神父様、聖なるマクシモスが霊的な意味であなたに益あることがらを言いえただろうかなどとわたしは考えたとするならばお赦してください。文字通り外面だけの哲学的意味とはいえ、彼が言った多くのことがらは万人にとって永劫に説明し尽くされずに残される可能性があるのです。<sup>174</sup>

(10) 『パイーシイ・ヴェリチコフスキーのギリシャ語からの翻訳による、かつてのニネヴィアの主教にして我らのシリアの聖神父イサアクの霊的功についての言葉』(1854)<sup>175</sup>

シリアのイサアクの著作が初めて世に出たのは 1812 年、ニヤメツ修道院でのことであった。その初版には「シリアのイサアクの書物のギリシャ語からスラヴ語への翻訳に関わる簡潔な説明」と題する序文が付けられている。パイーシイ・ヴェリチコフスキーはアトスの亜使徒聖コンスタンチンとエレナのスキトにいた頃、そこにあったイサアクの書物を読んでいた。その本の一部は彼が若い頃キエフの洞窟修道院に滞在していたときに写し取っていたが、残りの部分は熱心な修道士に頼んでアトスにいるうちに写してもらったのだという。しかしこの本には文法的に無意味な箇所が多く見られ、その部分の意味を正確に理解できなかったため、よりよい翻訳が現れたときに改訂に着手しようと考え、余白にいくつかの書付けを残しておいた。

その後ある修道司祭のもとで新たな写本が見つかった。その持ち主はその写本は四百年前から存在するブルガリアの“原本”とあらゆる点で類似しているはずだと断言した。つまりこのブルガリア版からギリシャ語の原典に遡ることができると考えたパイーシイは、この写本を修道士より六週間借り受け、夜を徹して両テキストを比較する作業を行った。しかし写本の中に印つ

<sup>174</sup> Из письма И.В. Киреевского к иеромонаху Макарию от 13 ноября 1854 г. В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 388.

<sup>175</sup> Святого отца нашего Исаака Сирина, епископа бывшего Ниневийского слова духовно-подвижнические, переведенные с греческого старцем Паисием Величковским: [На славянские наречия гражданскими буквами. Испр. пер. о. Макария (Иванова), И.В. Киреевского; Под сторч. примеч., предм. указ. иером. Макария, иером. Амвросия]. М., Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1854 (Унив. тип.) [2], XXVII, 480, 68, Пс. 2400 экз. 2 руб.



けられた箇所は改訂は実現されなかった。というのも、比較した両テキストが類似する写本であることがわかったからである。このことからパイーシイはこの翻訳の元テキストにあたるギリシャ語原典にあたる必要性を痛感する。こうしてパイーシイは書物改訂の作業を行う目的で、祖国で出版されたイサアクの手書きによる原典、それが不可能ならばせめて印刷されたギリシャ語原典を入手するために尽力することになる。しかしアトス滞在中にこの希望は叶えられず、アトスを出てモルドヴラヒアのドラゴミール聖神降臨修道院に移り住んで二十年間を過ごすこととなった。

パイーシイが写本の入手を諦めかけた頃、神の意志はエルサレムの総主教キール・エフレムに、人間の内的完成のための沈黙行を敢行する修道士たちに資する同書を出版しようという考えを抱かせることになる。総主教がこれに必要な事務的な任務を委任したのは教養の高い学僧キール・ニキフォル(当時はツァーリグラドにいたが、その後アストラハンの大主教になる)であった。折しもその頃パイーシイと同じドラゴミールに在籍する修道士がツァーリグラドにいたため、彼は出版の噂を聞きつけ、この本が出版された暁にはドラゴミール修道院にも一部送ってもらう約束を取りつけることができたのだった。<sup>176</sup>

これは 1768 年のことであったが、その二年後にギリシャ語版がライブツィヒで出版された。しかしこの翻訳はイサアクの作品の一部に過ぎなかった。パイーシイが待望していたイサアクの著作の印刷された版を手に入れたのは 1770 年の降誕祭の斎時であった。彼はおよそ一年間かけてギリシャ語とスラヴ語のテキストを比較し、スラヴ語訳に多くの訂正を加えたにも拘らず、これを新訳と称することはできなかった。しかしその後、イサアクのスラヴ語への新訳作成へのさらなる意欲を掻き立てられる出来事が起こった。アトスで新たにギリシャ語の写本が発見されたのである。この翻訳の仕事に賭けるパイーシイの意欲を知るアトスから、待望の翻訳のためという名目でこの写本が送られてきたのは 1786 年のことであったとパイーシイは書き残している。<sup>177</sup>すでに老境にさしかかっていたパイーシイにとって何年も要する大事業に取りかかるべきか否かは悩ましい問題であった。それでも彼は神の計らいでこの写本に出会った運命を無駄にすることはできなかったし、アトスからドラゴミールまで運ばれてきたこの本を目の当たりにすると、積年の写本

<sup>176</sup> См.: Никодим (Кононов), архим. Старцы: Паисий Величковский и отец Макарий Оптинский и их литературно-аскетическая деятельность. В кн.: Отечественные подвижники благочестия XVIII-XIX вв. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1996. Сентябрь. С. 465.

<sup>177</sup> Там же. С. 467.

研究で養われたギリシャ語力を生かして、イサアクを翻訳したいとの思いが再燃したのだった。修道士の仲間たちの間にこれに取りかかって欲しいという要望が高まってきたことも彼の決断を後押ししたとパイーシイ自身は回想している。<sup>178</sup>

それではパイーシイの翻訳はどのような手順で行われたのか。当時、彼の弟子であった掌院ニコジム（コノノフ）は以下のように回想している。

両テキストを詳細に検討した後、ギリシャ語版テキストを翻訳の底本とし、手稿を翻訳補助として用いることにした。実際翻訳に際して、それはおおいに役に立った。もし手稿がなく印刷されたテキストだけだったならば、わたしの翻訳はいかに努力したところで間違いなく躓いていただろう。スラヴ語のみならず、ギリシャ語の手稿テキストの多くの箇所印刷された本には見られない表現が散見されるからである。このことから古いスラヴ語の翻訳にも同類のギリシャ語手稿が用いられた可能性が高いと言える。パイーシイはこの聖なる書物の翻訳にあたって底本にはギリシャ語の印刷本を用いたが、一語一句まで逃さずギリシャ語の手稿とかつてドラゴミールで改訂されたスラヴ語訳を参照していた。また力の及ぶかぎり、ギリシャ語とスラヴ語の両言語の性質に目を配りつつ、名詞と動詞を語彙集で注意深く確認していった。わたしは自分の霊が心待ちにしていたこの仕事を、わたしの罪深い体の内的外的な病には一顧だにせず実行していった。こうして...知恵と祈りと沈黙を介して心に働きかける真の教師にして我らが克肖なるシリアの神父イサアクの力強い祈祷によって、わたしのこの翻訳は 1787 年に完成したのだった。<sup>179</sup>

この翻訳はサンクト・ペテルブルグとノヴゴロドの府主教ガヴリイル（ペトロフ）に送られた。そして府主教の尽力によって、1793 年に有名なパイーシイによる翻訳集『フィロカイア（Добротолюбие）』の一部として出版されたのである。

しかし 1801 年の府主教の死を始めとする様々な複雑な事情によって、この書物の出版（再版）は大きく正道から外れていくことになる。この初版から取られた写本は複数にのぼるが、それがいかなる運命によってロシアにそしてオブチナ修道院にもたらされたのかについては、すでに長老レオニード

<sup>178</sup> Там же. С. 467-468.

<sup>179</sup> Там же. С. 469.

(カヴェーリン) や長老マカーリイの活動について述べた際に触れてあるので、<sup>180</sup> ここでは省略し、キレエフスキー夫妻とマカーリイ長老が関わることになる写本の出版活動にしばって論を進めていきたい。<sup>181</sup>

パイーシイ長老の長年の労に報いるかのように、シリアのイサアクの著作のスラヴ語訳(「91の言葉」)の出版が1812年にモルドヴラヒアのニャメツ修道院で実現したことがその後のロシアにおけるこの文献流布の引き金になったことは否定できない。19世紀初頭には内容に関わりなく、霊的書物をロシアに持ち込むことが勅令によって禁止されたにも拘らずである。とりわけ修道士たちの関心を惹きつけたシリアのイサアクの著作写本は霊的書物の愛好家の手を介して密かにロシア国内に持ち込まれるか、もしくは写本が作成され、修道院や個人の蔵書中に保管されるようになったのである。例えばオブチナ修道院の保管庫に置かれていた写本の多くは大部の所有権を示す署名つきのものであり、それによってどの長老がそれらをオブチナにもたらしたかが推測できるようになっていた(レフ、マカーリイ、モイセイ、アントニイ等)。

しかし錯綜した写本の歴史を整理し、正しい写本の出版に尽力したという意味で他に例を見ないのはやはりマカーリイ(イワーノフ)長老である。彼の伝記の中で推理小説なみに複雑な経緯をたどるイサアクの写本作成の歴史が順序正しく解き明かされている点は注目に値する。

この手稿の運命はとりわけ注目に値する。それは白い艶だしされた全紙に行書体で書かれていた。半分以上はパイーシイ長老に近い弟子のスヒマ修道士フエオドルによって書かれたが、書き終えたのは彼の友人でモルダヴィアのロシア修道院で生活を共にしたスヒマ修道士のニコライ神父であった。その後この手稿はパイーシイ長老によってペテルブルグの府主教ガヴリイルに送られたが、その序文には(献辞に次いで)「此の翻訳の労を執りしはモルダヴィアの修道院の一たるニャメツの聖昇天とセクラの前駆者僧院の掌院パイーシイ・ヴェリチコフスキー(ポルタワ出身)なり」という自筆の署名が付けられていた。1801年に府主教ガヴリイルが永眠すると、いかなる経路かは不明ながら、手稿はある貴族の

<sup>180</sup> 拙著、「オブチナ修道院における聖師父文献の出版事業(2)」(神戸外大論叢、2018年第69巻)85-90頁参照。

<sup>181</sup> ここでは、出版を意図してあらかじめ取られた写本の存在にのみ触れておきたい。これが将来、キレエフスキーが再版する際に、着目されることになるからである。1) Рукопись «Творения Исаака Сирина» из фонда Леонида (Кавелина) (Ф. 557. No. 85), 2) Список с паисиевского перевода «Словеса постнические преп. Исаака Сирина» из фонда Оптиной Пустыни (Ф. 214. Опт-464). 後者の写本は1791年版をもとに1805年に取られたものである。



手に渡し、その人物によって販売するためにワラーム修道院に持ち込まれたのだった。というのも、そこには靈的生活を行う長老たちが住んでおり、彼らなら高価な価格で買い取ってくれるという噂を耳にしたからである。そのようなわけで、同書はそれをものした人物つまり当時ワラーム島に住んでいたスヒマ僧フェオドル神父の手に戻ったのである。(中略) 1821年にフェオドル長老が永眠すると、この本は彼がモルダヴィアを出た後、悲哀の暮らしを共にすることになった彼の愛弟子で道連れでもあった修道司祭レオニード(修道名レフ)に委ねられた。このレオニード神父はまだ存命中にその弟子のスヒマ僧アンチオフに贈り、こちらが永眠すると、レオニード長老のもう一人の弟子で当時アレクサンドル・ネフスキー修道院に暮らしていた修道士イオアニーキイ(スヒマ名レオニード)の手に渡った。このイオアニーキイは同書を自分も長らく滞在したことのあるカルーガ県のチーホン僧院の庇護者で、レオニード長老の霊の子であった老女エヴドキヤ・テレンチエヴナ・レスニコワに寄贈したが、彼女はそれを1849年にやはりかつてレオニード長老の弟子であった同僧院の修道司祭エフレム神父に委譲したのである。エフレム神父は自分の霊の子である修道士アヴラーミイに譲渡した。こちらは1858年にアトスに移り住むにあたり、この手稿をオブチナの長老スヒマ修道司祭マカーリイ神父に手土産に持ってきたのだった。マカーリイ長老は自ら死の病を得ると、その本とシリアのイサアクのイコンでスキトの修道司祭(後に掌院)レオニード(カヴェーリン)神父を祝福した後、最終的にオブチナ修道院のスキトの蔵書に寄贈したのであった。<sup>182</sup>

このようなわけで、シリアのイサアクの著作の手稿は一時期レフ長老の庵室の蔵書の中に存在していた。19世紀の初頭になると、モイセイ長老とアントニイ長老の個人蔵書から詳細な所有者の署名入りの手稿がいくつか流れ込んできた。<sup>183</sup> モイセイ長老について言えば、彼は1808年にブリャンスクのスヴェンスク修道院に入り、翌年の8月に正式に見習い修道士となっているので、彼が後にオブチナにこの修道院で取られた写本をもたらした可能性は

<sup>182</sup> Жизнеописание оптинского старца иеросхимонаха Макария [Сост. Агапит (Беловидов), архим.]. Свято-Введенская Оптиная Пустынь; Свято-Троицкая Сергиева Лавра; М., 1997. С. 116-117.

<sup>183</sup> それらのうち、現在確認されている代表的なものは、以下の二点である。1) Словеса постнические Исаака Сирина. Рук. нач. XIX в. (1806-1811), полуустав. 272 л. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-465.; 2) Словеса постнические Исаака Сирина. Рук. 1811, полуустав. 259 л. Вероятно список с Опт-465. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-466.

高いと言える。<sup>184</sup> このように写本の整理を含む空白の期間はあったものの、オブチナ修道院でシリアのイサアクの著作の出版活動が始まったのは 1852 年のことであり、それが日の目を見るまでにさらに約二年を要した。

オブチナ修道院におけるイサアクの著作の出版には利用可能なすべての出版された書物と写本とが用いられた。つまり 1770 年のギリシャ語版、1812 年のスラヴ語版、新たに翻訳されて 1821-29 年まで雑誌『キリスト教読本 (Христианское чтение)』に掲載された 30 の説教の翻訳、および 1840 年代末から 1850 年代初頭にかけて行われた帝室モスクワ神学大学教授長司祭デリーツィン (П.С. Делицын) によるいくつかの翻訳などである。しかし長老マカーリイはメモの中で同書の出版の見通しを次のように書き記している。

シリアの克肖者イサアクの著書の印刷に関しては敢えて何かの資金供与を画策することはしなかった（おそらく、同じ聖人の神学大学によるロシア語訳がすでに印刷されていたからである—聖伝著者による注釈）。しかし神は自らの運命によって突然その意思を現され、我々が 2400 部の出版物を目の当たりにするという大いなる霊的な慰めをお与えになられた。以下にその顛末を記すことにする。わたしが 1852 年にモスクワを訪れて、キレエフスキー夫妻と同書の（神学大学版）ロシア語訳について話し合った折、同書のパイーシイ長老によるスラヴ語訳を出版したらどんなに素晴らしく有益であろうという話になった。そして夫妻には機会を捉えて府主教フィラレート座下に上申することも提案した。ちょうどその頃わたしはトロイツァ大修道院にいたため、この件について院長の掌院アントニイ（メドヴェージェフ）神父に提案した。わたしが去った後、彼は話し合いの可能な様々な機会を捉えてこの件について府主教座下に報告を行ったのだった。<sup>185</sup>

こうして同書出版を許可する府主教座下の祝福が院長掌院アントニイを介して下された。府主教フィラレート座下はパイーシイ長老の出版以来、スラヴ語への翻訳の意義を何人よりも認めていたことはすでに指摘したが、<sup>186</sup>

<sup>184</sup> 注 182 のレフの蔵書に入った 1) の文献の表紙に以下のような書付があるがそのように推測する所以である、「同書を以てスヴェンスク修道院の修道司祭セラピオン、主における我が愛する兄弟を祝福する。1811 年 12 月 3 日に彼への愛の徴として。スヴェンスクの典院アムヴローシイ」。

<sup>185</sup> Жизнеописание оптинского старца иеросхимонаха Макария. Сост. Агапит (Беловидов), архим. Свято-Введенская Оптиная Пустынь. Свято-Троицкая Сергиева Лавра. М., 1997. С. 148.

<sup>186</sup> 拙著、「オブチナ修道院における聖師父文献の出版事業（2）」（神戸大論叢、2018 年第 69 巻）87-88 頁参照。

この大修道院の掌院アントニイもこの見解に共感し、オブチナの長老たちによる知的活動の促進に大いに寄与したことは繰り返し強調しておきたい。その掌院アントニイがオブチナの長老マカーリイに宛てた書簡の中でこう書いているからである。

...それに加え、いくつかの箇所についてはちょうど大ワルサヌフィオスの著作においてもそうだったように、原作から取られた注釈が施されているが、これは役にたつだろう。だがたとえこれが困難な作業であっても、やはり印刷することが望ましい。注釈がついたスラヴ語のテキストはわたしに言わせればロシア語以上のものである。なぜならば言語の特質から見て、この翻訳は原作により近いものだからである。わたしは新訳をさほど信用していないのだ。<sup>187</sup>

こうしたプロセスから、オブチナにおける聖師父文献の庇護者として確実に重要な役割を果たしたのがモスクワ府主教フィラレートであり、同様の資質を持つ主教はその後久しく現れてこなかった。府主教のお墨付きをもらったオブチナの長老たちは1852年7月18日にシリアの克肖者イサアクの40話の説教を検討し終え、それに対する注釈を書き終えたことが年代記に記されている。<sup>188</sup>

この新訳に対する準備の周到さと綿密さについて何よりも証言してくれるのが長老マカーリイとイワン・キレエフスキーとの浩瀚な往復書簡、それに数的にはさほど多くはないが、重要度の高い府主教フィラレートとの往復書簡である。後者は本職の多忙さにも拘らずあらゆる方面からオブチナの出版活動を激励したばかりか、最も難解な箇所の翻訳と解釈に自ら進んで参加していたのである。

1852年8月、キレエフスキーは長老マカーリイに宛てて受け取ったシリアのイサアクの説教の翻訳の一部に関してこう書き送っている。

あなたが大修道院の翻訳のうち満足されないすべての箇所について、今日までわたしにはあなたが完全に正しく、あなたの解釈の方が的を射

<sup>187</sup> Из письма архимандрита Антония к о. Макарию от 18-21 сентября 1852 г. В кн.: Иеромонах Ераст (Вытropicкий). Историческое описание Козельской Оптиной Пустыни и предтечева скита (Калужской губернии). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни. 2000. С. 246.

<sup>188</sup> Летопись скита во имя святого Иоанна Предтечи и Крестителя Господня, находящегося при Козельской Введенской Оптиной пустыни. М., 2008. Т. 1. С. 232. (НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361. Л. 37.)

ていると思われます。しかしそれにも拘らず、パイーシイの翻訳はやはりどれよりも秀逸だと感じます。たしかに一見して、そこに見られる解釈は必ずしも明瞭ではないこともあるのですが、この不明瞭さこそがさらなる集中した探索へと駆り立ててくれるのです。しかしスラヴ語に翻訳されたものの中にはたんに言葉の表現のみならず、ニュアンスそのものによってより完全な解釈となっている箇所もあります。例えば、あなたの翻訳の中に以下のように書かれている箇所があります、「心は、聖なる楽しみのほかに様々な感覚に奉仕することに熱中してしまう

(Сердце, вместо божественного улаждения, увлечется в служение чувствам.)」。その箇所がスラヴ語訳では以下のようになっています、「心は神の甘さから感覚への奉仕へと撒き散らされる (Рассыпается бо сердце от сладости Божия, в служение чувств.)」。この「甘さから撒き散らされる (рассыпаться от сладости)」という言葉は、外面的な論理からは正しくないかもしれませんが、真の理解を知恵の中に注ぎ込んでくれます。ちなみにこれは神の甘みを手に入れることができるのは心の全一性のみであり、この全一性が維持されなければ心は外的な感覚にのみ奉仕することになるということを教えてくれているのです。また「それは自らの心の真理によって自らの知恵の目を浄化する (Иже истинною сердца своего уцеломудряет видение ума своего)」という表現がありますが、これは心の働きによる矯正についての理解を与えてくれるだけでなく、不浄な願望は心がつく嘘であり、それによって人間自身が実際には願わないことを願っていると考えることで自らを欺くのです。<sup>189</sup>

この書簡に対して、早くも数日後にはオブチナからキレエフスキーに宛てて返書が発送されたことがわかっている。マカーリイ長老はこう書いている。

パイーシイ長老の翻訳がすべての点においてロシア語訳よりも優れているというあなたの説には全く同感です。そもそもわたしの理解にとってこれ以外のものは必要ありません。もちろん時折わたしの乏しい知恵にはわかりかねることもあるにはあるのですが、概して一般の読者や、とりわけスラヴ語の言い回しに通じていない読者にとって多くのことを理解することは困難でしょうし、だからと言ってそこで取り上げられて

<sup>189</sup> Из письма И.В. Киреевского к о. Макарию от 12 августа 1852 г. В кн.: Киреевский И.В. Рузум на пути к истине. Сост. Н. Лазарева. М., 2002. С. 325-326.

いるテーマの意味に注意深く考察することを彼らに強いることもそれ以上に困難でしょうから。スラヴ語の言い回しはしばしば自らに大いなる、高邁で神秘的なものを内に含んでいます、ロシア語ではそれらを十全に表現することは到底できないのです。<sup>190</sup>

マカーリイ長老とキレエフスキーのやりとりの主な内容は個々の言葉や概念の翻訳をめぐる問題であったが、それは意味を的確に伝える適当な訳語を見出すために専らキレエフスキーの側から発せられる質問や意見という形で表明されたものだった。キレエフスキーの注釈は翻訳がかかえる最もデリケートな部分にまで入り込み、ときには長老に対して独自の翻案を示すことさえあったのである。

あなたの翻訳の二つの単語、*созерцание* (観照) と *доброе* (善きもの) に関するわたしの意見を言わせていただきます。あなたが *созерцание* を *видение* (視る) もしくは *зрение* (観ずる) という単語に優先させる理由は何でしょう。西欧の思想家たちに好まれる新しい *созерцание* という語は *видение* よりも *рассматривание* (見渡す、検討する) の意味を持っています。それゆえ例えば、祈りの状態から知恵が *рассматривание* (見渡し) のレベルに上がるとは言えないのと同様に、*созерцание* (観照) のレベルに上がるということもできません。ひと度ギリシャ語の *θεωρία* という単語を *видение* と訳す必要があるのなら、つねに一つの単語に一つの意味を持たせることで問題はないと思われます。このようにして我々にはスラヴとギリシャの霊的な著述家たちの霊的な言語に合致する正しい哲学的言語が確立されることになるのですから。二つ目の語 *доброе* はスラヴ語ではロシア語の *прекрасное* (素晴らしいもの) と同じ意味を表すように思われますが、あなたはいつもロシア語でも *доброе* の単語を使って訳しておられます。これでは場所によっては不十分な意味にしかならないようにわたしには思われるのです。例えば、第 27 話の終わりにかけて、シリアのイサアクは (性質の) *доброе* (善良さ) と *изящное* (優美さ) の完成を *разум* (理性) の下位区分に加えようとしているようです。スラヴ語において前者は *благое* (福たるもの)、後者は *доброе* (善なるもの) と命名されています。したがって、造形美術 (*изящное искусство*) の働きはすべてこのレベルの理性の領域に含めることができるのです。です

<sup>190</sup> Из письма о. Макария к И.В. Киреевскому от 18 августа 1852 г. Там же. С. 328.



が изящное もしくは прекрасное という語を доброе という語に置き換えてしまえばこうした意味はすっかり失われてしまうことになります。<sup>191</sup>

この手紙から3ヶ月後の1852年11月27日、シリアのイサアクの説教の翻訳は無事終了し、原稿はモスクワの府主教フィラレートのもとへ送られた。府主教座下は翻訳原稿に目を通し何箇所かに加筆を行った。翌1853年の3月にはマカーリイ長老に宛てて以下のような書簡をしたためている。

怒涛のごとき人々と事件の波と闘う我々が、それを汚してしまうことなく、いくらかでも静謐と自由の岸辺に触れることができるようお祈りくださいますように。この拘束状態から解放されるまでに数ヶ月が過ぎ去り、ようやくあなたによって印刷の準備がなされたシリアの聖イサアクの手稿を読むという喜ばしい事業に専念するための時間を見出すことができました。ところが、またもやそれを仕上げることなく、わたしを取り巻いている避けがたい勤務上の問題に戻らざるをえません。教師の言葉とあなたの解釈に注意を払いながら、一気に半分近く読みました。さらにいくつかの場所については何度も見直したのですが、それを続けることができない以上、また長い間それを手放すことを危惧して、明日手稿を検閲官に送ることにしました。わたしがどうしてもそのようにしたのかをあらかじめあなたに説明する機会も持たずに、向こう見ずな手であなたが施した注釈に手を加えることになったことをどうかお赦してください。本のいくつかの箇所はギリシャ語が不明瞭ですが、それはスラヴ語訳についても言えます。ついでに言えば、おそらくその原因はシリアから来たギリシャ人翻訳者にあるのでしょう。これらの箇所に付けられたいくつかの注釈はただの憶測にすぎませんし、ギリシャ語のテキストには十分呼応していませんでした。このような場合、わたしにはシリアの聖イサアクの代わりに我々の考えを読者におしつける危険を冒すくらいなら、その箇所を不明瞭なまま残した方がよいように思われたのです。またいくつかの事例においては、解釈が教義の精神に合っていないように感じました。第44説教の以下の箇所がそれにあたります。本文：「*眞実の只中で、ただ沈黙を守ることは好しからぬことである (безмолвие простое посреде правды укорно есть)*」。これには「ただ (простое)」と

<sup>191</sup> Из письма И.В. Киреевского к о. Макарию от 21 августа 1852 г. В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 331.

いう語に対して「*恩寵の働きを感覚することなく (без чувства благодатных действий)*」という注釈が施されています。果たしてほんとうにいつも、恩寵の働きが感じられないときに、沈黙を行うことは好しからぬ、つまり非難に値することなののでしょうか。それに優れた修行者はすぐに恩寵の働きを感覚することができるのでしょうか。感覚しえた者であっても、未熟さや用心深さのせいで、時にその感覚が薄れてしまうことはないのでしょうか。それゆえ、わたしはこの解釈を「*それ以外の功や徳を持たずに (без других подвигов и добродетелей)*」と変更しました。ギリシャ語の本でも、このような意味で注釈がなされています。ただひとつの注釈だけは、わたし自身の判断だけでは変更する決心がつきませんでした。これについては、これに補足する書きつけを付けています。もし、わたしが提案する変更同意なされるならば、手稿に加筆するために検閲官に渡しますから、わたしが提起した解釈を返送してください。わたしが自分の判断で行ったそれほど重要ではない変更箇所については言うまでもないでしょう。数も多く、手間もかかりますから。<sup>192</sup>

このフィラレートの書簡を見てわかることは、この教養ある府主教がオブチナの長老に対する並々ならぬ謙遜と敬意に貫かれ、同修道院の聖師父文献出版の庇護者としての責任感において際立っていることである。その責任感、オブチナの翻訳の権威づけというよりは、パイーシイの翻訳に対する絶対的な信頼と、「我々の考えを読者におしつける危険を冒すくらいなら、その箇所を不明瞭なまま残した方がよい」という原文重視の立場にも十分発揮されている。マカーリイ長老の返書にはそうした府主教の思いへの感謝の気持ちが溢れている。

座下の多くの困難と多くの問題にもかかわらず、功と広大な我が祖国の偉大なる牧者たちへの配慮に貫かれた座下は、そのご意志と祝福によりそれを一瞥され、スラヴ語テキストのいくつかの不明瞭箇所に対する解釈と解説を付けて、印刷に付すために我々が準備したシリアの聖イサクの手稿を読むために時間を割かれ、我々の脆弱な仕事に対して主教としての座下の関心を向けてくださいました。これはひとえにあなたさまの高邁な人格と、聖師父による霊的な書物を広め、それによって我ら

<sup>192</sup> Из письма митрополита Филарета к о. Макарию от 9 марта 1853 г. В кн.: Иеромонах Ераст (Вытропский). Историческое описание Козельской Оптиной Пустыни и Предтечева скита (Калужской губернии). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни. 2000. С. 256-258.

が正教会の子たちを養うといったあなたさまの愛のなせる業なのです。この手稿を主教座下に献呈するにあたり、我々は自分の解説を敢えて正しいと見なしたことは一度もありません。しかし、主教座下が慈愛に満ちた関心を向けてくださるのではないかという期待に慰められ、実際そう思うことで幸福な気持ちになりました。まことにあなたさまによってなされた変更は公平で聖なるものであると考えております。...いくつか散見されました不明瞭な箇所につきましては、我々もそのまま放置することを望まず、敢えて説明をつけようと試みたのですが、もし座下が憶測に基づく考えに拘泥するよりも、不明瞭な箇所は不明瞭のまま残す方がよいとお考えならば、主があなたさまにそう告げ知らせたものと信じます。きっとそうすることがよりふさわしい有益なことなのでしょう。

府主教座下がコメントと変更を加えられた二つの箇所に関しましてはもちろん、自分の考えが正しいとは見なしておりませんが、我々がどのように理解していたかを意を鼓して座下に申し上げようと思います。第 44 話の、「*真実の只中でただ沈黙を守ることはよろしからぬことである*」に対して我々は「*恩寵の働きを感じることなく*」という説明を施しました。府主教座下は苦行者といえどもこのレベルに達していない者や、その他の理由からこれを感じないこともありうると公正にも指摘されましたが、我々はここで書かれた文言以上に、沈黙を成就させる計算された働きを念頭において、「*真実の只中でただ沈黙を守ることはよろしからぬこと*」という言葉、高度な修行を行なっている人々に絞って検討しようとしたのであり、そもそも、ただ沈黙を守りさえすればよいという非難に値する人々のことを念頭においていたわけではありませんでした。もともと、その中にも各自の霊的な経験年数によってレベルの高低があることは言うまでもありませんが。我々はこのように理解しておりましたが、我々の考えを完全なかたちで表現することはできませんでした。座下による訂正「*それ以外の功や徳を持たずに*」は大衆の理解により近いですし正鵠を射ています。なぜならば、功の完成によって恩寵の実感が成就するのですから。

また第 21 話の本文「*清浄は本質を超えて存在しつつも、この世において本質から賦与された人々による分別の忘却である (чистота есть забвение разума сущих чрез естество, обретенных в мире от естества)*」に対する我々の注釈は、本物の分別も正確さも表現していませんが、座下の注釈はきわめて明確で正しいものですので、座下のお許しをいただけるのなら、何とぞ我々の誤った解釈と入れ替えてくださるようお願い

申し上げます。<sup>193</sup>

1854年3月に『シリアの聖神父イサアクの靈的功に関する言葉』は2400部印刷された。この出版物には2ルーブリの値が付けられたほか、府主教フィラレートはこの出版にかかった費用を弁済し、今後のオブチナ修道院の出版活動のための資金として100ルーブリを寄付した。<sup>194</sup> この出版活動の理念として、不明箇所には各行ごとに注をつけることを条件に、パイーシイの翻訳は完全に維持されることとなった。これによって、出版者はいささかも原文を歪曲することなく、詳細な注釈付きで、読者にパイーシイの翻訳の原典を伝えることができるようになったのである。同時に、本文にはマカーリイ長老自身によるアルファベット順の事項索引が付けられた。マカーリイ長老の伝記を最初に書いた掌院レオニード(カヴェーリン)は、同書の出版を「オブチナ修道院のすべての出版物の中でも最も貴重なひとつ」<sup>195</sup>と称している。

キレエフスキー自身もシリアのイサアクを東方正教会の靈的著作家の中でも最も深遠な思索家一人と見なしていた。世界の宗教的環境自体が人間に及ぼす影響について関心を抱いていたキレエフスキーにとって、正教の神秘的かつ禁欲的伝統によって育まれた人間学、認識論を体系的に叙述したこの聖人の著作は自らの問題意識に対するひとつの答えを与えたと言えるのではないだろうか。この問題については後述するが、ここでは彼の世界観の形成に革新的な意義を投げかけた「全一的精神(цельный дух)」という概念の形成に言及するにとどめたい。彼はこの概念の根源を究明する過程において、東方教会聖師父の文献が大きな鍵を握っていることを知ったことで、その出版活動に大きく参与するようになったとさえ思われるのである。

マカーリイ長老とその弟子たちによる様々な写本の整理とロシア語への翻訳は、すでに述べたように、長期間にわたる周到な作業を要するものとなった。それは1852年に完成を見ることになるが、ここで忘れてはならないのは、同年にトロイツァ・セルギイ大修道院版のロシア語訳も世に出たことで

<sup>193</sup> Из письма о. Макария к митрополиту Филарету от 17 марта 1853 г. В кн.: Иеромонах Ераст (Выгрозский). Историческое описание Козельской Оптиной Пустыни и Предтечева скита (Калужской губернии). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни, 2000. С. 258-260.

<sup>194</sup> Жизнеописание оптинского старца иеросхимонаха Макария [(Сост. Агапит (Беловидов), архим.)]. Свято-Введенская Оптина Пустынь; Свято-Троицкая Сергиева Лавра. М., Отчий дом. 1997. С. 158.

<sup>195</sup> Жизнь оптинского старца Макария. Сост. Леонид (Кавелин), архим. Изд. Введенской Оптиной Пустыни. 1995. С. 168.

ある。キレエフスキーはこの大修道院版に不満を覚えていたようである。

キレエフスキーがシリアのイサアクの出版準備に関わっていた頃、実に不可思議な出来事が起こった。イサアクの編集出版に関していくつかの点を問い合わせる目的で、マカーリイ長老がキレエフスキーに手稿の中のある不明瞭な箇所に関する自分の見解を分かち合ってくれるように依頼する書簡を書いたことがあった。それに対してキレエフスキーは次のように答えている。

というのも 16 年ほど前、わたしが初めてシリアのイサアクを読んだとき、いかなる運命の巡り合わせか、たまたまこの箇所について今は亡きノヴォスパスク修道院のフィラレート神父に説明を求めたことがありました。神父はわたしにこう言いました。この箇所はこう解釈すべきだろう、つまり「すべての被造物の頭にして礎」という言葉は、大天使ミハイルのことと考えればよいのだと。どうやら、これをあなたに伝えるべきはフィラレート神父だったのかもしれませんが。しかし、あなたは当時あの方の周りにおられなかったように、神は他ならぬそのことを彼に尋ねるという考えをわたしに抱かせたのでしょう。<sup>196</sup>

キレエフスキーが府主教フィラレート（ドロズドフ）を訪問した際、彼はこの点について府主教に尋ねている。それに対して府主教は、自分も初めてこれを読んだとき、その箇所に疑問符をつけたが、それは今でも残っていると告白したのだった。キレエフスキーはマカーリイ長老への書簡の中で書いている、「わたしが彼に、かつて亡きフィラレート神父がこの箇所について、大天使ミハイルのことであると自分に説明したことを告げると、わたしもそれが言いたかったのだと府主教はわたしの言葉を遮りました。そこでわたしは彼にこう言いました。フィラレート神父と府主教座下の意見が一致したということは、もはやわたしにはこの箇所の意義について些かも疑念の余地はございません」<sup>197</sup>。

この本は主としてモルダヴィアから持ち込まれた写本にしたがって出版の準備が進められた。この過程について克明に記されたマカーリイ長老の覚書が残されている。長老は書いている、「1852 年、わたしがモスクワにいたとき、同書のロシア語訳についてキレエフスキー夫妻と話したおり、パイーシイ長老のスラヴ語訳を印刷することができたらどんなに素晴らしいことだ

<sup>196</sup> От письма И.В. Киреевского к о. Макарию от 12 августа 1852 г. В кн.: В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 327.

<sup>197</sup> От письма И.В. Киреевского к о. Макарию от 26 августа 1852 г. Там же. С. 334.



ろうという話になり、夫妻におりを見て、府主教フィラレートにそれを提案してはどうかと持ちかけた」。<sup>198</sup> その後府主教は出版に同意し、マカーリイ長老に大修道院の図書館に所蔵してあったギリシャ語版のシリアのイサアクの本を使用して、いくつかの不明箇所の説明を加えるよう指示したのだった。オブチナの修道士たちは写し取った説明付き写本をフィラレートに送ると、府主教はそれに目を通し、それに加筆して、出来上がったものを検閲にかけてために神学大学の学監の掌院セルギイに手渡した。

1853 年 7 月にキレエフスキー夫妻は写本を受け取ると、それを印刷にかけるために校正作業を開始した。マカーリイ長老はこの間の経緯について覚書にこう書き記している。

主は我々が同書に付けるアルファベット索引を作成することを助けてくださった。こちらも検閲によって印刷を許可されたのである。こうしてこの神の靈感溢れる書物が神の助けと、府主教の祝福を得て印刷に付された。そして最初の三部が 13 日の我らの光明週間に、つまり輝かしいこの祭日に最も相応しい贈り物として修道院に送付された。<sup>199</sup>

同じ出来事について、レオニード（カヴェーリン）神父もオブチナ修道院の年代記にこう書き記している。

1854 年 4 月 13 日、この日ナタリア・ペトローヴナ・キレエフスカヤ氏には新たに印刷された書『シリアのイサアクの靈的功についての言葉』を三部送付いただき、〔マカーリイ〕神父や我々一同は大いに喜び慰められた。神父も認めておられるように、同書を世に出すにあたっては、パイーシイ長老の翻訳をギリシャ語の原典と照合させるなど尽力された府主教フィラレート座下の特別な配慮に負うところが大きかった。座下はそのために神学大学の図書館から〔原典の〕一部を送付されたばかりか、宗教検閲を通過させるための責任を一身に負われたのである。また出版に関わる労は、全面的に長老に心服し、飽くことを知らぬナタリア・キレエフスカヤ氏が執られた。それは 1500 銀ルーブリかかり、自分用の一部に 1 ルーブリ 50 コペイカかかっている。ところで、出版のための総費用は紙幣ですでに 15000 ルーブリかかっているのである。どこから資金

<sup>198</sup> Неизвестная Оптина. СПб., 1998. С.287.

<sup>199</sup> Там же. С. 288.

が集められたのかは、それを送ってくださった方、つまり「神の名によりて顚しし愛の労を忘れざらん」(エウレイ書、6章10) 者のみをご存知なのである。

1853年5月23日、今日ナタリア・キレエフスカヤが荷馬車でシリアのイサアクの本を315部送ってきた。そのうち、マカーリイ神父は154部を手元に残して、残りは掌院に渡すなどし、すべてを各方面に無料で頒布した。書物の出版のために、すでに15000ルーブリを消費していたにもかかわらず、出版関係者たちはこの資金をどこから調達したのかという周囲の問いには良心にしたがって答えようとはしない。ただ「神が送ってくださった」と答えただけであった。<sup>200</sup>

同書は他の多くの書物同様に、教会スラヴ語の非教会(俗用)アルファベットで印刷された。その序文においては、ギリシャ語、スラヴ語、モルダヴィア語といった複数の原典を用いてなされた翻訳の特殊事情について説明されている。また同様に、シリアのイサアクの様々な言語の写本を入手し、それをどのように扱ったかということなどパイーシイ長老自身の話が引用されていた。パイーシイ長老は、スラヴ語がその深い知性、音の美しさ、豊かさから見て古代ギリシャ語に最も近い言語であるとおねに指摘していた。しかしながら同時に、逐語訳を行ううえで目につく両言語の文法的不一致についても指摘していた。スラヴ語にはギリシャ語の上書き記号が存在しないため、文の中での語のつながりにおいて混乱を引き起こすことがあった。パイーシイ長老は、語の上に点を振ることでこの問題を解決したのである。ちなみに、オプチナの出版物においては点が行ごとの脚注に置き換えられている。

既に上で述べたように、シリアのイサアクの30の言葉は、はじめ雑誌『キリスト教読本(Христианское чтение)』に掲載された。1854年にはギリシャ語からなされたモスクワ神学大学版の完全訳が世に出ている。モスクワ神学大学教授セルゲイ・ソボレフスキーも言っているように、『キリスト教読本』の30の言葉の翻訳はかなりよくできており、文学的でもあるが、時折自由すぎるくらいがある。モスクワ神学大学の翻訳はより直訳的だが、不明瞭な箇所も多い。<sup>201</sup> この神学者ソボレフスキー教授の意見はそれぞれの翻訳の特

<sup>200</sup> Летопись скита во имя...М., 2008. Т. 1. С. 319. (НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361. Л. 197. об. 201.) この文献の主たる出資者がフィラレート府主教であることは上に述べたが、キレエフスキー家も一部負担したと言われる。

<sup>201</sup> Сергей Соболевский, профессор Московской духовной академии. Сведения о преподобном Исааке Сирийце и его писаниях. В кн.: Иже во святых отца нашего аввы Исаака Сириянина. Слова

徴を端的に言い当てている。しかも彼はこれらの欠点を補う目的で、パイーシイの翻訳を下敷きにシリアのイサアクのロシア語訳を準備したのである。しかしその序文では、やはり避けがたいテキストの不一致を解決するために、その他のいくつかのギリシャ語原文とも照合させざるを得なかったと説明している。

意味上の齟齬が生じたり、そもそもロシア語訳が何らかの疑念を呼び起こす多くの場合は、ニキフォロス・フェオトキスが出版したギリシャ語版(1770)や場合によっては、モスクワの宗務院図書館所蔵の数点のギリシャ語写本と照合させた。しかしギリシャ語の本文も古いとはいえ、イサアクが書いたシリア語からの翻訳であるため、我々は時には西欧の文献一覧に含まれるより新しいシリア語からなされた翻訳を参照することも有益であると考えた。...それでも聖イサアクの高邁な思想を理解するのに困難をとまなう多くの箇所には翻訳のテキストに説明的な注釈を施すことが不可欠となった。そのうちの一部は(ほんの僅かであるが)我々自身が施したものであるが、大部分は1854年に印刷されたパイーシイ版の翻訳に対する注から、それにニキフォロス・フェオトキスのギリシャ語版から我々が引用したものである。<sup>202</sup>

こうして概観してみると、1854年のシリアのイサアクの言葉の出版が、その後のイサアク文献改訳の運動の権威的源泉となっていることが明らかであろう。この修道士たちの修行書の翻訳出版に一世俗思想家の夫妻が果たした役割は資金調達面以外にも、決して小さくはなかったのである。

#### (11)『克肖なる我等が神父、ファラシオス師の愛、節制、霊的生活に関する数章』(1855)<sup>203</sup>

パイーシイ・ヴェリチコフスキーによってギリシャ語からスラヴ語に翻訳された版にもとづく本書は、進堂祭オブチナ修道院(Введенская Опти́на

подвижнические. М., 1993 (репринт с изд. Сергиев Посад. 1911). С. X.

<sup>202</sup> Там же. С. XI-XII.

<sup>203</sup> Преподобного отца нашего аввы Фалассия главы о любви, воздержании и духовной жизни переведены с греческого на славянский старцем Паисием Величковским и изданы от Введенской Оптиной Пустыни с предложением на русский: [4 сотницы]/ [Испр. и доп. пер. с двумя текстами славянским и русским окончательно ред. Филаретом, митрополитом Московским]. М.: Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1855 (Унив. тип.). 122 с. 1200 экз.; [2-е] изд. М., 1885. В рус. пер./ Под ред. Филарета, митр. Московскаго; [3-е] изд. М., 1894. 1200 экз. 30 коп.

Пустынь) よりロシア語訳を付して出版された。四百章節 (Четыре сотницы)<sup>204</sup>からなる本書はそもそもギリシャ語版フィロカリアに収められていたが、その版からパイーシイ自身によってロシア語に翻訳された。したがって、オプチナの修道士たちはそこに敢えて注釈を付けずに、そのままスラヴ語訳の対訳としてロシア語訳を並置して出版したのである。

ここでも本書出版の準備に、府主教フィラレート (ドロズドフ) が積極的に参加した。1854 年 11 月にキレエフスキーはマカーリイ長老に宛ててこう報じている。

ナタリア・ペトロヴナ〔妻〕はあなたに、10 日ほど前に府主教が検閲官に提出した何点かの写本、つまりファラシオス師の四百章節とカリストス・アンチリクダ (Каллист Антиликуда ма)<sup>205</sup>の数章に目を通すためにわたしのところから持参したと書きました。昨日わたしは府主教座下の祝福を求めるゼーデルゴリムと一緒に座下のもとに行き参りましたが、座下は話のついでに、ファラシオス師の四百章節を読んだが、それは単行本として出版すべきである、そこには有益な言葉が数多く含まれているからだ、しかし読者は霊的な書物を読むことに消極的で、大部の書物を見ると恐れをなしてしまうので、小さなものにして読ませるようにすればよいだろうとおっしゃられたのです。だが、翻訳にはかなり不明瞭な箇所もあるので、シリアのイサアクの本の時のようにあなたにも加わっていただきたい。つまり、まず明瞭な字体で写し取るよう指示を出し、原典と照合しながら頁の下に短い注釈を付ける。そしてスラヴ語の写本から筆耕もしくは翻訳者による明らかな誤りが見つかれば、本文中に直接修正を加えてくれないだろうかとおっしゃったのです。<sup>206</sup>

これを受けて、1855 年の 2 月 7 日には翻訳されたファラシオス師の四百章節のうち、第一章節がオプチナから府主教フィラレートに発送された。<sup>207</sup> そ

<sup>204</sup> ここでいう百章節 (сотница) とは、中世の修道制の修行理念を表す複数の文献からの百の書き抜きからなる束という原義をもつ。本書は四つのそうした束 (章節) から成り立っている。

<sup>205</sup> カリストス・アンゲリクド (Каллист Ангеликуд) のことか? 静寂主義者のグレゴリウス・パラマスの後継者と言われ、1351 年の教会会議で静寂主義の正統性を承認させたことで知られる。См.: Путь к священному безмолвию. Малоизвестные творения святых отцов-исихастов. Сост. А.Г. Дунаев. М., 1999. С. 10.

<sup>206</sup> Из письма И.В. Киреевского старцу Макарию от 5 ноября 1854 г. В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 385.

<sup>207</sup> Летопись скита во имя... М., 2008. Т. 1. С. 343. (НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361. Л. 245.)

の4ヶ月後の1855年6月にナタリア・キレエフスカヤはマカーリイ長老に宛てて府主教との面会と翻訳の訂正過程について次のような報告をしている。

わたしはファラシオス師の第三百章節を府主教に手渡しました。府主教座下は「これは何かね」と訊ねられましたので、「ファラシオスの残りの一章節です。〔マカーリイ〕神父は第四百章節の最後の数章節を翻訳しませんでした。というのも、神学の最高峰のいくつかの項目を叙述するにあたって間違いを犯すことを恐れられたからなのです。そこで、府主教座下のご判断に委ねたいと思うのです。ですから主があなたに真実を明かされますように」と申しました。すると、「不要なことだ。彼ら〔オブチナの修道士たち〕が訳せばよかったのだ。それによってわたしを助けることになるのだから。ちょっと待ってくれ」と言い残して、隣の部屋に出て行きました。座下は両手に聖ファラシオスの第一章節を抱えて戻って来ました。「これが第一章節です。わたしはこれを読んで少し訂正を加えました。ある箇所については我が意を得たりと思って書き直したのですが、その後ここ大修道院でギリシャ語の原典を見つけると、それが間違いであることに気づいたのです。そこでさらなる訂正を加えました。ですが別の箇所は状況が異なっていました。というのは、おそらく原典に一語遺漏があったからなのです。そこでわたしからと言って長老たちに手渡していただきたいのです。そしてわたしの訂正がうまくいったかどうか訊ねてみてくれませんか。わたしもあれこれ考えてみたのですが、どうやってこの章節を彼らに渡したらいいのか思いあぐねていたのです。だからあなたに渡すことができて嬉しく思います」。わたしは感謝の気持ちを伝え、あなた〔マカーリイ長老〕なら深甚なる感謝の気持ちとともに主教の慈愛を受け取ってくださいでしょう、あなたの訂正は善行にも等しいのですからと申し上げました。座下は「ならば長老たちの判断に委ねよう」とおっしゃられました。そこでわたしは訊ねました、「長老たちが書き直されたら再びわたしがここにお持ちすればよろしいのですか」。「それでもよいし、直接検閲に持ち込んでも構わない。都合のよいようにしなさい」。<sup>208</sup>

1855年6月、ファラシオス師の第一章節がオブチナに戻ってくると、

<sup>208</sup> Из письма Н.П. Киреевской к старцу Макарию от 14 июня 1855 г. В кн.: Иеромонах Ераст (Выгрозский). Историческое описание Козельской Оптиной Пустыни и Предтечева скита (Калужской губернии). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни, 2000. С. 279.



府主教フィラレートはマカーリイ長老に宛ててこう書き送っている。

ファラシオス師の翻訳をお返しします。そこにはわたしが書き込んだ跡がありますが、おそらく字体に対するばかりか、知性にも不快感を呼び起こすかもしれません。これからはあなたの判断に委ねます。

わたしが何をいかなる理由で行ったのかについてお話しするのも無駄にはならないだろうと思います。第一百章節はパイシーの翻訳できと照合しました。いくつかの章で疑いを抱いたので原典にあたってみました。それ以外の三つの章節については何かに突き動かされたかのように、ほとんどギリシャ語の原典と首っぴきに、そしてときにはギリシャ語の原典と同時期に印刷されたラテン語の翻訳とも照合しました。しかし両者はつねに類似しているわけではありませんでした。つまり、いくつかの章にはギリシャ語の、そして時としてラテン語の原典の助けが不可欠であることがわかったのです。もっともある数章においては我々の翻訳の方が明らかに正しく、印刷されたギリシャ語の方が不明瞭で明らかに意味が通らないものもありましたが。

第三百章節の 59 章では、我々の翻訳に触れずにそのままにしてありますが、ギリシャ語からの翻訳には注が付けられています。つまり正確な読みという点でいくらか疑念があるのですが、わたしの考えでは、真実に近い読みはむしろギリシャ語の方であるように思われます。なぜなら「労を愛する友に爾は己の目の覆ひを見出さん（в трудолюбивом друге ты найдешь покров очам твоим.）」という言葉重視するのは思いつきで無理があるとしか思われなからです。しかし、「労を愛する友に爾は己の過ちの覆ひを見出さん（в трудолюбивом друге ты найдешь покров твоим погрешностям.）」という言葉は明瞭な意味を持っています。しかもその言葉の出典を使徒の言葉、「罪人を其の迷へる道より反らしめし者は多くの罪を掩はん（обративый грешника от заблуждения покроет множество грехов）」<sup>209</sup>に見出すことができるからです。<sup>210</sup>

<sup>209</sup> イアコフ公書、第 5 章 20 を参照、「知るべし、罪人を其迷へる道より反（かへ）らしめし者は、霊を死より救ひ、多くの罪を掩（おほ）はん（Пусть тот знает, что обративший грешника от ложного пути его спасет душу от смерти и покроет множество грехов.: Иак. 5, 20)。

<sup>210</sup> Из письма старца митрополита Филарета (Дроздова) к старцу Макарию от 22 июня 1855 г. В кн.: Иеромонах Ераст (Вытropicкий). Историческое описание Козелькой Оптиной Пустыни и Предтечева скита (Калужской губернии). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни, 2000. С. 281-282.

この府主教の丁寧な書簡に対する返書として、マカーリイ長老は以下のようにしたためている。

主教職という苦勞多く有益なる役職に就いておられながら、この度は我々がナタリア・ペトローヴナを介して座下にお送りしたファラシオス師の第一百章節の写本から作成したスラヴ語訳とともにロシア語訳にもお目通しされる時間を作っていただく榮に浴することができました。我々は返送された写本を喜んで拝受し、多くの箇所主教自らの手にてなされた翻訳の修正を拝見することができました。それは我々にスラヴ語テキストの正しさと我々の浅知恵とを明確に示しております。のみならず、残りの三百章節にも主教様のお目通しをいただくという大いなる慈愛の気持ちを表していただきました。この上なく慈悲深き主教様、これによって主教座下にさらなるご負担をおかけすることになります我々の厚顔をどうかお赦しくくださいますようお願い申し上げます。<sup>211</sup>

これによってオブチナ修道院の古文書館には、府主教フィラレートの鉛筆による修正を含むファラシオス師の著作の類稀なる写本が保存されることになった(その部分は後にインクで囲まれることになった)。マカーリイ長老はこの写本の冒頭にこう書き込んでいる、「この写本はコゼーリスクのオブチナ修道院において、1855年にそこに所蔵されるモルダヴィアの長老パイーシイ・ヴェリチコフスキーのスラヴ語の翻訳数種から編まれ、モスクワとコロメンスクの府主教フィラレート座下の監修を経たものである。ロシア語訳を行なったのは、同修道院の修道士ユヴェナーリイ・ポロフツェフと同レフ・カヴェーリンである。府主教座下はこの翻訳を精査し、ギリシャ語とラテン語のテキストと照合し、最初の〔章節の〕百章には手ずから鉛筆で修正を加え、それ以外の三百章節にはインクで修正を施した。それから扱われる事項が高尚であるため、翻訳せずに残されていた17章も彼自身が翻訳し、自筆の書簡を付けてオブチナ修道院の修道司祭マカーリイのもとに6月22日付けで送付した。最初の百章節は浄書して再びナタリア・ペトローヴナ・キレエフスカヤを介して彼のもとに届けられた。同じ頃、彼はそれを検閲官であったモスクワ神学大学の学監掌院セルギイ(リャピデフスキー)に渡した。残りのものは浄書が終わると、ナタリア・ペトローヴナ・キレエフスカヤを介

<sup>211</sup> Из письма старца Макария митрополиту Филарету от 25 июня 1855 г. Там же. С. 283.

して 1855 年の 7 月 25 日に検閲官に渡された」。<sup>212</sup>

この僅か 120 頁ほどの小冊子の翻訳とその修正にオブチナの複数の修道士とマカーリイ長老、それに府主教フィラレートがこれほど積極的に関与したことは極めて稀な事例というべきである。この冊子の主題でもある愛と節制、霊的生活の内容が示すとおり、これらが正教会の教理の本質的要諦をなしていたからである。こうした小冊子を普及させようとした府主教の判断で、難解な部分の翻訳を回避したことにもそれは表れている。文献学的に見ても重要な省略部分と本書の翻訳事業の過程を表す府主教とマカーリイ長老との往復書簡が補遺という形ですべて刊行されたのは 1894 年の第 3 版においてであった。この版を監修したエラスト（ヴィトロプスキー）神父の功績は、後に単行本『コゼーリスクのオブチナ修道院の歴史的記述（Историческое описание Козельской Оптиной Пустыни.）』として 2000 年に日の目を見たのだった。

本書刊行までの足取りを辿ってみると、キレエフスキーの果たした役割は妻ナタリアの仲介者としての役割以外、さほど大きくないと思われるかもしれないが、そもそもこの本の写本の出版が話題となったとき、ナタリア・ペトローヴナが府主教に手渡したファラシオス師の写本が、彼女がノヴォスパスク修道院の霊父フィラレートから引き受けていたものであったことを思い起こしてみれば決して小さくないのである。夫イワンが主となってこの写本の注の作成が行われたとなればなおさらである。

（12）『克肖なる我等が神父ドーロテオス師（アッヴァ・ドロフェイ）の霊に益ある教理と彼の問い、及び聖なる長老大ワルサヌフィオスと預言者イオアンネスによるそれへの回答付き親書』（1856）<sup>213</sup>

マカーリイ長老の祝福を受けて、ギリシャ語の原典からロシア語への翻訳が将来オブチナの修道司祭となるクリメント・ゼーデルゴリムによって行われた。詳細な事項索引は修道司祭アムヴローシイ（グレンコフ）によって作成されている。本書出版の準備に際しては、ギリシャ語版（1770 年、ヴェネ

<sup>212</sup> Главы о любви, воздержании и духовной жизни аввы Фалласия (Ливийского и Африканского). Рукопись 1855 г., скоропись, исправленная и дополненная рукою митрополита Филарета. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-547. Цит. из кн.: В.В. Каширина Литературное наследие Оптиной Пустыни. М., 2006. С.161.

<sup>213</sup> Преподобного отца нашего аввы Дорофея душеполезные поучения и послания с присовокуплением вопросов его и ответов, данных на оные святыми старцами Варсануфием Великим и Иоанном Пророком: [Пер. на рус. яз./ Пер. с греч. К.К. Зедегольма; Сост. предм. указ. Иером. Амвросия (Гренкова)]. М., [Изд. Оптиной Пустыни], 1856. XIV, [1], 283 & [1], 43 с. 1200 экз.

ツィア)と修道スヒマ司祭パンヴァ・ベルインダ<sup>214</sup>によるスラヴ語訳(1628年、キエフ)が使用された。

ドーロテオス師の質問と長老大ワルサヌフィオスとイオアンネスの回答のスラヴ語のテキストは、『克肖なる神父大ワルサヌフィオスとイオアンネスの弟子たちの質問への回答形式による霊的生活への指南書(Преподобных отцев Варсануфия Великого и Иоанна руководство к духовной жизни в ответах на вопрошения учеников.)』の中ですでに印刷されている。同書は1852年にオブチナ修道院で出版されたが、こちらは1855年に修道司祭アマヴローシイ(グレンコフ)と修練士レフ・カヴェーリンと修道士イオアン・ポロフツェフ等によって新たに翻訳され、出版されたロシア語版である。

マカーリイ長老と彼に近い弟子たちはドーロテオス師の翻訳を集中して行なう目的で、しばらくの間キレエフスキー夫妻が所有する静かな領地に出かけた。これに関しては修道院の年代記に記述が残されている。「1855年8月17日水曜日朝5時、マカーリイ神父はマント付修道士ユヴェナーリイと見習い修道士レフを伴い、40露里ほど離れたキレエフスキー夫妻のもとへ赴き、同月26日まで滞在した。そこでドーロテオス師の教理の翻訳と見直しを行うためであった。彼らはこの時森の中で神父を憩わせるためにキレエフスキー家の母屋から1.5露里ほど離れた場所に造られた離れですごした。生活に欠かせない住居の配慮や設備については、滞在者たちが霊的な仕事を行うために必要な沈黙が完全に保たれるようすべてが万全に備わっていた。1855年の9月2日、ドーロテオス師の本の翻訳の見直しが終わり、検閲に発送するためにそれをナタリア・キレエフスカヤに送った」。<sup>215</sup> 同書は1856年の1月に印刷のための許可があり、最終確認のために修道院に送られた。

こうして出版のための原本となる手稿は修道院に残されたが、出版される時、そこには詳細な以下のような但し書が付けられた。「本手稿はコゼーリスクのオブチナ修道院において編まれた。克肖者ドーロテオス師の本は1855年にモスクワ大学の学生コンスタンチン・カルロヴィチ・ゼーデルゴリムによってモスクワでギリシャ語の民衆語(народный язык ма)からロシア語に翻訳された。さらに同年オブチナ修道院にてこの翻訳はスラヴ語の古い翻訳

<sup>214</sup> Памва Берында, иеросхимонах. Йерлсалрм教会の総主教座から最長老(протоѕункеллос)、キエフ教会からは主任印刷員(архитипонраф)の称号を与えられ、17世紀初頭からキエフで修道関係の出版活動を行なったことで知られる。См.: Евгений (Болховитинов). Словарь исторический о бывших в России писателях духовного чина греко-российской церкви. 1827. Т. II, С. 150-151. (Репринт)

<sup>215</sup> Летопись скита во имя... М., 2008. Т. I. С. 365. (НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361. Л. 287-288.)

と照合された（その際、修道士ユヴェナーリイ・ポロフツェフとレフ・カヴェーリンによって日常語の言い回しに修正された。他方、修道司祭マカーリイと同アムヴローシイによって目録が作成された）。それを含む聖ドーロテオス師の本がモスクワで印刷されたのは 1856 年のことだったが、こちら〔オブチナ修道院〕にそれが初めて運ばれてきたのは同年の 7 月 22 日のことである。印刷に先立ち手稿はモスクワ府主教座下であるフィラレートに託され、座下の祝福を得て検閲所に持ち込まれたのである。そこでモスクワ神学大学の学監を務める検閲官掌院セルギイによって印刷するための認可が下されたのが 1855 年 12 月 31 日のことであった。<sup>216</sup>

ドーロテオス師のオブチナ版翻訳を贈られたオブチナと縁のある神学者イグナーチイ（ブリャンチャニノフ）はマカーリイ長老に宛てた書簡の中で本書の文献学的な一貫性を高く評価している。「わたしの考えでは、この翻訳はきわめて上首尾に作られています。頁の下に設けられた注も意味をきわめて明瞭に説明してくれています。新進の修道士であった頃の聖ドーロテオスの質問に対する偉大なる長老たちの回答が完全に収められていることもきわめて重要なことです。というのも、後に著しい霊的な発展を遂げることになる人物が体験した葛藤や無理解を余すところなく提示してくれているからです。ロシアの修道界全体があなたや尊敬すべき修道士たち、それにあなたの協力者たちに聖ドーロテオスを読むことでもたらされる豊かで秀逸なる食卓を準備してくれたことに対して感謝すべきでしょう」。<sup>217</sup>

またそれと並んで、オブチナ修道院の出版物に付された他の著作集と同じ原則のもとで作成された『克肖者ドーロテオス師の著作集に含まれる説教のアルファベット索引』の充実ぶりについても指摘しておかなければならない。この索引は同著作において 105 の大きなテーマを含んでいるが、さらに意味による下位区分を有している。例えば、「怠惰（Леность）、無気力（нерадение）」という事項には、以下のような説明が加えられている。「たとえ僅かな怠惰からも身を守る必要がある。なぜならそれが我々を大きな危機に陥れることになるからである」（第 11 講）、「無気力と安逸は霊を弱体化させる」（第 13 講）。

これらの索引はマカーリイ長老の信任を受けた修道司祭アムヴローシイ

<sup>216</sup> Книга аввы Дорофея – русский перевод. Рукопись второй половины XIX в., скоропись, 169 л., текст правлен чернилами. 34×22.3 // НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-555. Л. 1. Цит. из кн.: В.В. Каширина Литературное наследие Оптиной Пустыни. М., 2006. С. 167.

<sup>217</sup> Из письма о. Игнатия (Брянчанинова) о. Макарию от 1 сентября 1856 г. В кн.: Святитель Игнатий (Брянчанинов). Странствие ко вратам вечности: переписка с оптинскими старцами и П.П. Яковлевым, делопроизводителем свт. Игнатия. М., 2001. С. 102.



が担当した。しかしここではすでに『長老ワルソヌフィオスとイオアンネスの指南書』(1852)の刊行時より索引そのもの提案者兼執筆者としてイワン・キレエフスキーが関与したことが記憶されるべきであるし、その成果がこの書の索引においても生かされていることは疑いの余地がない。しかし、誠に遺憾ながら、印刷された同書がオブチナに持ち込まれたのが7月22日となっていることは、モスクワを馬車で出発したのが少なくとも2、3日前としても、6月11日に命を落としたイワン・キレエフスキーがそれを目にすることは叶わなかったのである。しかし、存命中の彼が関わった最後のオブチナ文献がこのドーロテオス師の書であったことは間違いない。

この書物が衆目を集めるだけの価値を持っていたことは、後世やはりオブチナの長老となるヴァルソノーフィイ神父が、やはり将来最後のオブチナ長老となるニコライ・ベリャーエフ(後の長老ニコン)に対して言った言葉に表れている。「“ドーロテオス師”というのは修道生活のいろはである。この本は3年に一度は通読すべき書である」。ヴァルソノーフィイ長老は“ドーロテオス師”と“階梯の書(Лествица)”を読み返しては、その都度これらの書物に何か新しいものを見出して、それによって霊的な成長を遂げた長老マカーリイをその好例として取り上げるのであった。「もし注意深く読むならば、次から次へと新しいことが現れてくる。各人にとって、これらの書物は自分の霊的な成長を表すバロメータのようなものなのだ」。<sup>218</sup> この言葉にも、修道生活とは縁のない一般読者の便宜を図る索引の作成を提案し、自ら多くの提案や要請を行なったキレエフスキーの意思の反映を見ることができる。その実、これが彼自身の救いにとっても必要不可欠な書物となっていたことを見れば足りよう。同書はオブチナ修道院が閉鎖されるまで都合10版を重ねたが、これも同書が修道生活に関心を持つ一般の読者にいかに広く真理の道を開いてきたかを裏付ける事実となっている(1856年の初版以後再版された年は1862、1866、1874、1885、1888、1895、1900、1904、1913年であった)。

### (13)『我等が克肖神父新神学者シュメオーン伝』(1856)<sup>219</sup>

キレエフスキーの死の年には、『我等が克肖神父新神学者シュメオーン伝』(1856)も出版された。これは参照するための引用句も少なく、出版者によ

<sup>218</sup> Житие оптинского старца Никона. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1996. С. 96.

<sup>219</sup> Житие преподобного отца нашего Симеона Нового Богослова, списанное преподобнейшим Никитою Стифатом учеником его, и преложенное на общий язык кратчае: [На слав.яз.] / Пер. о. Паисием (Величковским). М., Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1856 (Унив. тип.). 64 с. 1200 экз.

る補足もない教会スラヴ語による 64 頁ばかりの本文だけの小冊子である。これに関しては同書を数部府主教フィラレートに手渡したチェルチイ・フィリップの以下の証言が残されている。彼がオブチナの長老マカーリイに宛てた書簡の一部である。

昨日わたしは府主教座下のところへ行き、彼に製本済の本を一部と薄紙に包んだ 25 部を手渡した。これがあなたの本の包みであるとなると、座下はこうおっしゃいました。「ああそうか、だがどうしてこんなにあるのか」。それから座下はどういうわけでわたしに託されたのかと尋ねられるので、ナタリア・ペトロヴナの出立にともない、あなたの慈悲深きご配慮により、出版事業に関わる彼女の従前の役割がわたしに受け継がれたのですと申し上げました。すると座下はナタリア・ペトロヴナと彼女の状況についてわたしと話し合いました。座下はイワン・ワシーリエヴィチ〔キレエフスキー〕の死を新聞の通知を見て先刻ご存知でした。そこでわたしは座下に彼がレオニード〔長老レフ〕神父の隣に葬られた旨申し上げました。それを聞いた座下は、「おお、神は相応しい場所に彼を寝かせたものだ」と言われました。最後に座下はあなたに感謝するように命じてこう言われました。「長老たちに感謝しなさい。そして彼らにあなた方は寛容な方たちだと伝えなさい」。<sup>220</sup>

このシュメオン伝を出版した最大の目的は、同書の主題でもある長老制の靈的教育システムが端的に纏められていた点にあると思われる。同書に関して掌院ニコジム（コノノフ）はこう記している。

その内容的にもきわめて興味深いこの伝記は修道士にとって教訓的であるとともに、長老制がいかに有益であるか、若い修道士であっても経験ある長老の指導を得ることでどれほどの高みに達することが可能であるかを示す証拠にもなっている。新神学者聖シュメオンの生涯は東方教会の長老制の営みの一例である。つまり克肖者シュメオンは敬虔なる長老シュメオン（старец Симеон Благоговейный）の弟子だった。伝記には事実この長老の指導方法が数多く描かれている。このようにオブチナ修道院は新神学者長老シュメオンの著作をかつて出版したことで、克肖者シュメオンの伝記そのものをも出版する必然性が生じてい

<sup>220</sup> Неизвестная Оптина. СПб., 1998. С. 301.

たのである。と言うのも、それは長老の指導に関する話が展開する彼の十二の説教に対する自然な序文とも言える、その部分の最良の例証となっていたからである。<sup>221</sup>

イワン・ワシーリエヴィチ・キレエフスキーの没後もマカーリイ長老の手によって以下の文献が出版されたことは記憶さるべきである。『克肖者にして我等が抱神なる神父、苦行者マルコスの有徳的苦行に関する言葉（Преподобного и богоносного отца нашего Марка Подвижника нравственно-подвижническия слова）』（1858）、『克肖なる我等がタヴェンニシの神父オルシオス師の修道生活を確立させるための教え（Преподобного отца нашего Орисия аввы Тавенисиотскаго учение об устройении монашескаго жительства）』（1859）、『克肖なる我等が神父エギプトの隠遁者イサイヤ師の靈的徳義に関する言葉（Преподобного отца нашего аввы Исаии отшельника египетскаго духовно-нравственныя слова）』（1860）である。これらの3点の書物はすべてロシア語に翻訳されている。こうしてマカーリイ長老は1860年の自らの永眠に先立ち、手元に残されていたパイーシイ・ヴェリチコフスキーが関与したすべての聖師父文献の出版に漕ぎ着けることができたのだった。

思想家イワン・キレエフスキーの思想の発展経緯から言えば、このような稀有な出版計画への参加は彼の創造活動に占める歴史哲学的視点の形成に少なからぬ役割を果たしたと見なすべきである。なぜなら彼自身がロシア独自の啓蒙の基盤と見なしていたキリスト教的伝統に直に触れることができたからである。つまり（イイススの）知恵の祈りを礎石として禁欲主義的伝統を再興しようとしたパイーシイ・ヴェリチコフスキーの継承者である長老の指導を受けることで、東方教会の概念による修道制についての創造的集団の一員となったのである。これに関連して、キレエフスキーの思想の到達点をなす仕事となった『ヨーロッパの啓蒙の性格とそのロシアの啓蒙への関係について』（1853）、『哲学にとっての新しい原理の必然性と可能性について』（1856）、それに彼の全一的精神の原理となる人間学的認識論の定理が伺われる『断章（未完）』（1857）が執筆されたのはまさにこれら一連の仕事と同時期であったことを想起しておきたい。

<sup>221</sup> Никодим (Кононов), архим. Старцы: отец Паисий Величковский и отец Макарий Оптинский и их литературно-аскетическая деятельность. В кн.: Отечественные подвижники благочестия XVIII-XIX вв. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1996. Сентябрь. С. 511.

## 第六章 キレエフスキーの禁欲主義的人間学への指標転換と「知恵の祈り」について

キレエフスキーの「精神の全一性 (цельность духа)」に関する概念は、西欧において個の霊的な力を全体的な教会意識に統合させるためにトマス・アクィナスなどのスコラ哲学者が唱えた信仰 (感情) の理性 (分別) に対する優越性といった考え方に依拠していたわけではなかった。キレエフスキーも主張しているように、こうした枠組ではキリスト教教義の奥義をあますところなく開示することはできないからである。それを可能にするための新たな指標として彼が着目したのが聖師父の神秘的・禁欲的著作であった。<sup>222</sup>

ここで断っておかなければならないのは、キレエフスキーがこの教理に向かうようになったのは、妻ナタリア・ペトロヴナを介してノヴォ・スパスキー修道院のフィラレート神父と親しく交流し、神父亡き後はオブチナのマカーリイ長老に指導が受け継がれ、彼と共同で霊的文献の出版活動に従事するようになってからである。この頃から彼の思想に色濃く影を落とすようになったキリスト教的人間学の見識は文字通り聖師父的な直観に貫かれたものであった。哲学者にとって決定的な意義を持つものは、イイススの「知恵の祈り (умная молитва)」に関する根本的な理念を核とする神秘的・禁欲主義的伝統のみであるという主張はキレエフスキーに特有な観点である。

ここで想起しておきたいのは、パイーシイ長老には二つの知恵の祈りの形態、つまり「祈り・行動 (молитва-деяние)」と「祈り・視覚 (молитва-видение)」があったということである。言うまでもなく前者は初心者向けの、後者は上級者向けの祈りを指している。前者は霊的な完成を獲得するためのもので、その後人間は認識の陶醉 (экстаз) へと移行する。この二つの祈りの概念がキレエフスキーの認識にいかに関与し、その世界観に何をもたらしたのかについては後述するが、ここではその発端として彼の内的な変容の契機について確認しておきたい。

キレエフスキーが知恵の祈りに関心を抱くようになったのは、まずはマカーリイ長老が実践していたこの祈りに関する具体的な知識をシリアの克肖者イサアクの著作を通して知ったことに発していた。イサアクは人間存在を霊

<sup>222</sup> このことは、神学的概念を表すロシア語の用語に関してもパイーシイ・ヴェリチコフスキー長老のスラヴ語の翻訳を使用すべきとの彼の主張に現れている。キレエフスキーがマカーリイ長老に行なった提言もこの点に力点が置かれていた。「このようにして我々にはスラヴとギリシャの霊的な著述家たちの霊的な言語に合致する正しい哲学的言語が確立されることになる」という言葉は、聖師父文献の翻訳に際してキレエフスキーが一貫して堅持した信念である。См.: Из письма И.В. Киреевского к о. Макарию от 21 августа 1852 г. В кн.: Киреевский И.В. Разум на пути к истине. М., 2002. С. 331.

(душа) と体 (тело) に分け、その際、知恵 (ум) と心 (сердце) を人間学の最重要概念と見なしていた。彼によれば、知恵は言わば霊の目として、霊の感覚の一つを司っており、心 (臓) は霊のすべての感覚とそれらの中心部分を内包する器官であった。この霊を揺り動かしているのは慾 (страсти) であり、それは思いや発意 (помыслы) に発しているため、それを発達の初期段階で切断することが禁欲的修業の目的でもあり意義にもなっている。しかもこの慾は心のみならず知恵にも存していて、それらは様々な形態をとって組み合わされていることもあるという。したがって、知恵が容易に発意・思いを見いだし、容易にそれから浄められる状態にあるならば心を誘惑に誘うことは困難であるが、もし罪深い発意・思いが心に入り込んでしまえば、心をそれから浄めることはさらに困難になってしまう。

つまり聖師父の人間学における知恵とは「浮遊 (витание) する傾向がある積極的な認識器官なのである。世俗の発意・思いによって知恵が散漫になることは禁欲的修業において“浮遊 (витание)” もしくは“飛散 (парение)” と呼ばれる」。逆に、知恵が安定的な重力を獲得するのは、「神への恐れ」の度合いが強まることによるのだが、その「神への恐れ」は「知恵が世俗の気苦労から離れるとき信仰によって獲得される」とイサアクは言う。<sup>223</sup> 聖師父の伝統における心は霊の下部組織をなす保守的な要素である。心は霊ほど可動性を持たないが、それが知恵を浮遊から守っているため、霊の健全さは心の健康にかかっているという。その場合、祈りは分けても健全さへの最良の処方箋である。イサアクはこう教える、「自らに絶えず神に祈ることを強いるならば、発意を抱える心は浄められ、感動によって満たされることになる。そうすれば、神が備えた爾の道が誹られることがないように、神は爾の霊を不浄で邪悪な発意・思いから守ってくださる」。<sup>224</sup>

しかし心の惰性はしばしば発意・思いからそれを浄めるのを妨げている。というのも、神への恐れがなければ心はその清浄さを失い、霊の中核をなすことができずに淫欲な発意で満たされるばかりか、それらを守るようになってしまうからだ。この点についてもイサアクは詳細に教えている、「人間の真の生活の始まりは神への恐れである。だがこれは何らかの飛散 [もしくは散漫 (рассеянность)] によってもはや霊に留まり続けようと思わなくなる。心

<sup>223</sup> Гвоздев А.В. Святоотеческие корни Антропологии и гносеологии И.В. Киреевского. В журн.: «Вестник ПСТГУ. I. Богословие. Философия». 2006. Вып. 15. С. 144. この「浮遊」「飛散」といった概念はイサアク特有の言い回しで、定訳はないため、暫定的にこのように訳してある。

<sup>224</sup> Святого отца нашего Исаака Сирина, епископа бывшего Ниневийского, слова духовно подвижнические. М., 1854. (Репринт) С. 12.



が感情に奉仕するために神の甘さ〔叡智〕から離れてしまうのである。その結果、内的な思いが自らの感情によってそれに奉仕する感覚(感覚の諸器官、外面的な感覚)に縛りつけられてしまうのである」。<sup>225</sup> ところが、神への恐れは、心と知恵を潔浄(целомудрие)と呼ばれる有機的統一に持ち込むことで心を浄め、知恵を鎮めるのである。イサアクはこのような人間は「自らの心の真実によって自らの知恵の目を覚まさせる。それは放蕩な思いに恥知らずにも目を向けさせないためである」<sup>226</sup> と書いている。

キレエフスキーにおける神秘主義的人間論の萌芽を聖師父文献の出版活動の体験に関係づけたグヴォズジェフは、発生論的に見れば、霊の全一性についてのキレエフスキーの教理はこの理念に遡るといふ仮説を立てるのである。<sup>227</sup> 彼の所説に拠れば、心は霊の中核であり、すべての人間の才能はそこに統一を見いだすはずである。こうしてキレエフスキーは他ならぬ心と知恵の合一の可能性に注意を向けるようになる。その結果、キレエフスキーは西欧人におけるこの統一の欠如を指摘した上で、「ロシア人はすべての重要なことと重要でないことを、知恵に関する最高の理解と心の深奥なる核心とに直接結びつけてきた」<sup>228</sup> と主張するにいたる。

そもそも大ワルサヌフィオスは心と知恵の分かち難い関係について、「知恵を冷静にし、争いを生む思いから浄めるために心を潔く守ること」<sup>229</sup>が必要と説いている。この関係性から、キレエフスキーが心は「統一、合一」を求めるが、知恵が注意を怠るならば、忽ち発意・思いによる誘惑に陥る危険性があると見なしていたことは疑いない。つまり悪魔の誘惑から知恵を守るためには、東方の苦行者たちが行ったように知恵を心に合一させる必要を悟ったのである。如何にしてか。シリアのイサアクの書はやはりこれに対する答えがやはり「神への恐れ」の働きにあることを想起させてくれる。それは心からも、知恵からも、日常生活の些末事を追い出す、換言すれば、神への恐れは唯一の中核の周囲にある様々な感情を拾い集めてくれるからである。

「集められた潔浄なる感覚は霊の中に安らぎを生み出し、そこに事物を受け

<sup>225</sup> Там же. С. 3.

<sup>226</sup> Там же. С. 5.

<sup>227</sup> Гвоздев А.В. Святоотеческие корни.... В журн.: «Вестник ПСТГУ. I. Богословие. Философия». 2006. Вып. 15. С. 144.

<sup>228</sup> Киреевский И.В. О характере просвещения Европы и о его отношении к просвещению России. В кн.: Киреевский И.В. Полное собрание сочинений. Т.1, М., 1911. С. 303.

<sup>229</sup> Проподобных отцев Варсануфия Великаго и Иоанна руководство к духовной жизни, в ответах на вопрошения учеников. М., 1852. (Репринт) Отв. 91. С.73.

取る誘惑を残さない（霊には事物の体験に熱中させない）。<sup>230</sup>

心の側からの働きかけで知恵に影響を与えうる力とは祈りである。祈りは知恵を飛散や浮遊から救いそれを覚醒させる。もとより知恵が散漫になっている時に霊的な書物を読むことの効用は多くの聖師父が認めるところであるが、祈りはさらに高度な霊的な作用を呼び起こす。シリアのイサアクは言う、「爾の知恵が浪費される時、それ以上に祈りを読むべきである。もし可能ならば立ってそれを行うとよりよい。そもそも潔き祈りというもの、もともとはそのようなものだったからである。決して嫌々それをやってはならない。飛散から自らを覚ますのだ」。<sup>231</sup>

知恵の飛散、すなわち散漫によって祈りが完成されないならば、知恵は心と一体になることはできない。これは日常的に人間が晒されている数々の罪からの救いとは異なる次元の闘いがここでは意識されることになる。大ワルサヌフィオスはこの散漫について以下のように分析している。「飛散によって知恵が苦悩するのはこのことである。そうなった人は自分自身を呼ばわってこう言うべきであろう、“主よ、爾の聖なる名によりて我が無意識によって捕らわれしことを赦し給へ。飛散と敵の網より我を護り給へ。蓋し、爾の光栄は世々にあればなり。アミン。” 爾が何ものかに夢中になると次のようになる。つまり自分が何かについて語っていても知恵は飛散した状態に陥る。例えばあることについて話していても、その人の知恵は別のことに夢中になってしてしまう。これが熱中・夢中（восхищение）というものである」。<sup>232</sup>

これをスラヴ語に翻訳したパイーシイ・ヴェリチコフスキーはオブチナの修道士たちに先駆けて、この「発意・思いとを集める〔刈り取る〕」ことで飛散した知恵を再び心に結びつける、つまり知恵の祈りの技術をロシアで初めて記述していた。祈りによる全一性〔統一〕の状態は心の中で知恵を「低くする〔遜る〕」ことによって達成される。「必要なのは、祈りの時知恵が感覚から逃げて、心まで深く沈下し、あらゆる思いから めしひみしひ 盲聾の如く離れて立つことである」<sup>233</sup>とシナイ人グレゴリウスの書物の序文に書いたのは、スヒマ僧ワシリイであった。

言うまでもなく、このワシリイ長老の知恵と心の定義はまだ一元的で、肉体的な解釈と言わざるを得ない。彼は別の箇所でこう書いている、「知恵が心の上に立っているとき、それはその中間にて祈りを実践する。だがちょうど

<sup>230</sup> Святого отца нашего Исаака Сирина, ... М., 1854. С. 26.

<sup>231</sup> Там же. С. 190.

<sup>232</sup> Проподобных отцев Варсануфия Великого и Иоанна. ... М., 1852. Отв. 669. С. 456.

<sup>233</sup> Житие и писания молдавского старца Паисия Величковского. М., 1847. С. 75.

王が宝座に座るように、下方で企てられる邪惡な思いを氣楽に眺やると、それはハリストスの名によってそれらを石で打ち砕く。...そうになるとその腰から遠く離れることによってのみ、アダムの罪を超えて我々の本質にとどまっている肉欲の嵐から何とか逃れることができるのである」。<sup>234</sup>

ここで言われていることは、人間の肉体構造における空間的範疇が知恵の祈りを実践する上で重要な意義を持ちうることを示している。つまり上方への動きは靈性への関与を、下方への動きは俗世の慾への関与を表しているからである。聖師父が教える祈りの理論に拠れば、知恵が心の下方部分に触れることはできず、それでも心の下方領域を垣間見ようとする者は肉欲に囚われてしまうのだという。

祈りによる遡りの方法に関して、パイーシイ・ヴェリチコフスキーはその著作の中で、新神学者シュメオーンの方法（『祈りの三つの像<sup>かたち</sup>について』）に範を求めていることも注目すべきであろう。

無言で庵室の部屋の片隅に腰掛けると、以下に指示する通りに実践しなさい。まず扉を閉めなさい。それから爾の知恵をあらゆる煩わしさから取り上げ、感覚の目を知恵とともに働かせて、顎髭を胸の上に固定させなさい。勢いよく呼吸を吐き出すことのないように、鼻から息をすることを抑制しなさい。そしてすべての靈の力が好んで留まろうとする心の位置を胎内に見いだそうと倦むことなく努めなさい。...爾がこの状態に留まり、昼も夜もこれ続けるならば、何という奇跡であろう、終わりのなき愉悦を手に入れることができるのである。同時に知恵も心の場所を見いだすならば、たちまちかつて見たこともないものを見るであろう。つまり心の領域に広い空間を見ることで、自分にとってもそれが何よりも明るく思考に満たされていることに気づくのだ。そうすることで、思いは自らの企てを実行し、偶像を拝むより先にそこから逃げていき、イイスス・ハリストスの名を唱えることでそれを追い出し利用することができるのだ。それによって知恵は悪魔たちを疎んじ、その本性にしたがって我々に怒りを燃え立たせ、攻撃することで思いの中にある敵たちを引きずり降ろすのだ。さらに人々に対しても神とともに知恵を悪魔から守り、心にイイススを留める術を教えるのである。<sup>235</sup>

<sup>234</sup> Там же. С. 93.

<sup>235</sup> Там же. С. 206.

この祈りの手法をまとめれば以下ようになる。知恵は吸い込まれた息とともに心に入る。だがその際、空気が心（臓）の上部より下に下らないようにタイミングを見計らって息を止める必要がある。知恵は始めのうち狭苦しさから憂鬱に囚われるかもしれないが、慣れてしまうと外部の感情に依存している状態から解放されていく。<sup>236</sup>

新神学者シュメオーン、シナイ人グレゴリウスらの所謂 14 世紀ビザンツの静寂主義者（исихасты）たちの呼吸法と関連した祈りの方法に関する見解はほぼ一致していたと言われる。無點性（無罪性）というものが霊（душа）の生まれもった性質である以上、知恵の祈りは人間を慾に濁らされていない原点に回帰させてくれる。こうした観点からパイーシイ長老は祈りというものを神に対する知恵の献げものと見なしていた。

神の創造によって清浄にして無點のものである人間の霊は神の像であるとともに似姿でもある。それは肉体における目と同様に、霊の感覚の最上のものたる知恵が無點であるのと同じである。しかし知恵が祈りによって神秘の献祭を奉るように、心も自らを生贄として捧げることはできないのであろうか。決してそのようなことはない。人間の体はすべて同様に神の創造物である以上それは完全に善なるものである。仮にイエスを呼ばわることが救いをもたらし人間の知恵や心も神の手の業であるならば、人間が心底から聖なる甘きイエスに祈りを献じ彼に慈悲を冀うことを悪と言いうるであろうか。<sup>237</sup>

知恵の祈りとは知恵と心の一体化（それゆえ、心の全一性という概念が生まれる）した働きを前提にしていながら、その段階において知恵の低次の現れとしての心を神に献ずる祈りの意味をも認めるパイーシイの祈りの理論はロシアの数多くのインテリゲンツィアや正教徒たちに影響を与えた。パイーシイ長老の書を校正したキレエフスキーがこれからどれほどの感化を受けたかは、1852 年 8 月 12 日のマカーリイ長老に宛てた手紙の中で「神の甘みから感覚への奉仕へと心が“撒き散らされる（*рассыпается*）”という言葉の解釈に寄せて、普遍的な「神の甘みを手に入れることができるのが心の全一性のみである」と表明していることから十分に伺えることである。<sup>238</sup> キレエフスキーに生じた内的な変容の契機はこの頃に始まると推定することはさほ

<sup>236</sup> Гвоздев А.В. Святоотеческие корни.... С. 147.

<sup>237</sup> Житие и писания молдавского старца Паисия Величковского. М., 1847. С. 198-199.

<sup>238</sup> 注の 187 を参照せよ。

ど困難ではあるまい。

しかしながら、正教信仰に目覚めたばかりの初心者はもとより、修道士でもない俗人が一足飛びにこの「知恵の祈り」の苦行を実行することに関して、マカーリイ長老は厳しくこれを禁じ、その危険性について機会あるごとに説明していたことは注目に値しよう。

知恵の祈りはいかなる営みより高度なものであると同時に、自己流でそれを行おうとする者には罰にもなりうるものです。…これについてはあなたに書いたとおり、祈りをやめさせようとしたのではなく、時期尚早にしかも自分の器を超えた自己流のやり方でその賜を期待することは危険であると申し上げたかったのです。聖マカリオスはこう言っています。「大きな賜を熱望する人は同じくらいの力によって悪魔に墮落させられるでしょう。愛の実りや謙遜な知恵などに配慮すべきなのはそうした理由によるのです」(第3話、2章)。…あなたの確信を促すために、それを目指しその賜を求める者に宛てたシリアの聖イサクの教えをもう一度掲げておきます。「聖なる人よ、あなたの営みが雑念へと成長しないことを祈ります。むしろそれに陥るくらいなら今あるものに忍耐することを学びなさい。大いなる謙遜と心の悲しみをもって我々の行いと我々の思いにおける罪の赦しと霊の遡りを主に頼むのです。<sup>239</sup>

マカーリイ長老の霊の子となったイワン・キレエフスキーが聖師父文献に触れたことで彼自身の中に大きな変容が生じたことはすでに述べたが、その一因となったのがこの知恵の祈りであったことは疑いの余地がない。しかし彼は長老に上記の理由からこの祈りに入ることは固く禁じられていた。しかしそれでも彼が自らの悪癖や家庭内の諍いや罪から免れることができたのは、彼が常に長老の祈りに守られていたことの証ではなかったか。彼がその祈りの力について、何ら疑いを挟むことがなかったことは事実なのである。

(以下次号に続く)

**Keywords:** パイーシイ・ヴェリチコフスキー イワン・キレエフスキー  
マカーリイ(イワノーフ)長老 オブチナ修道院 聖師父文献

<sup>239</sup> Душеполезные поучения преподобного Макария оптинского. Сост. Архимандрит Иоанн (Захарченко). М., Изд. Введенской Оптиной пустыни. 1997. С. 313-314.